当事者主体を目指した知的障害者生涯学習支援事業

－社会福祉士・保育者養成校における実践を通して－

○淑徳大学短期大学部　樋田幸恵（5531）
打浪　文子（淑徳大学短期大学部・7714）

オープンカレッジ・知的障害・エンパワメント

１．研 究 目 的

リカレント教育・生涯学習の機会の社会的な増加に伴って、社会に出ると学びの機会が激減してしまう知的障害者の生涯学習が､2000年前後より着目されるようになった｡特に、大学をフィールドとした知的障害者向けの継続的なオープンカレッジの実践など、全国的にも意欲的な実践が見られる[1]。

本報告では、社会福祉士・保育者養成校であるA短期大学において実施した知的障害者生涯学習支援事業のプログラムの意図及び実践の詳細を述べる。また、実践後に実施した当事者・参加学生・保護者へのアンケート調査の記述結果から、当事者主体的なオープンカレッジの内容および社会福祉士・保育者養成課程に在籍する学生の障害者の当事者主体性の理解の必要性と意義を明らかにすることを目的とする。

２．研究の視点および方法

A短期大学ボランティアセンターでは、B区在住・在勤の知的障害児者を対象とした知的障害者生涯学習支援事業を平成18年度より実施している。これまでに「パソコン教室」「おしゃれ教室」（C社会教育会館との共催）や「スポーツ教室」「食生活入門」など、参加者のニーズに対応する様々なテーマを設定して、年3~4つの企画を実施してきた。

その経過を踏まえ、当事者主体性を参加者全員が理解することを目的に、体験及び学生とのコミュニケーションを重視した当事者主体的なプログラムである「一日大学体験」を企画し、2012年2月及び2014年6月に計2回実施した。実践後に、感想や障害者への意識変容を知ることを目的とした当事者･参加学生･保護者へのアンケート調査を実施した。2012年度32名（回収率91.4%）、2014年度35名（回収率100%）から回答を得た。

３．倫理的配慮

日本社会福祉学会の「研究倫理指針」に従う。当事者および学生には、得られた回答は統計的に処理を行い個人が特定できないよう配慮することを伝え、同意を得た。

日時	2012年2月	2014年6月
テーマ	「一日大学体験　ー語り合おう、表現しよう、自分の今、これからのことー」	「一日大学体験　ー学んでみよう、語らおう、表現しようー」
午前	大学体験（概要説明、レクレーション）	講義体験（「造形」による自画像作成）
昼食	学食体験	学食体験
午後	ゼミ体験（自己紹介資料作成と発表）	ゼミ体験（レクレーション、自分史作成と発表）
参加者	当事者15名　保護者　5名　学生スタッフ15名	当事者13名　保護者5名　学生スタッフ17名

２）実施上の特徴

「みんなで知る見るプログラム」を参考にしてプログラムを構成した[2]。エンパワメントアプローチを意識し、当事者と学生が一対一で終日行動し、当事者の主体的活動をサポートした。なお保護者の参加は発表時の観覧のみであった。

３）アンケート結果

当事者が印象に残った内容は「学食体験」（13人48.1%）、「発表したこと」（9人33.3%）であった。また自由記述では「学生と話せて良かった」ことに言及する傾向が見られた。

他方、学生は、「学食体験」（10人33.3%）、「レクリエーション」（12人40%）となった。また自由記述では、初めて障害者と接した学生は「障害についてたのしく理解することができた」「新鮮な体験だった」、障害者の支援について経験のある学生は「実習で得た援助技術を振り返ることができた」と回答する傾向が見られた。

５．考 察

当事者は学生とのコミュニケーションを通じて、能動的に活動に取り組んでいたことがうかがえる。人前で自ら発表する経験が最も印象に残った当事者が多かったことから、当事者主体的かつ自己表現を促すプログラムが意義深い体験となったこと、また当事者主体的なプログラムによる生涯教育の保障が今後も継続的に必要であることが示唆された。

また学生は各自の経験により異なる回答が得られたが、障害理解の深まり及び社会福祉援助技術の深化があったことがうかがえる。エンパワメントアプローチによる当事者主体的な活動への援助経験が、学生の障害理解及びストレングス視点の深化に非常に有効であることが示唆された。

---

[1]建部久美子・安原佳子（2001）『知的障害者と生涯教育の保障 オープンカレッジの成立と展開』　明石書店

[2]社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会編（2013）『みんなで知る見るプログラム』社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会